

2020年7月12日聖餐式説教

本日は7月の第2日曜日、日本聖公会が定める「海の主日」です。全世界のミッション・トゥ・シーフェアラーズの働きおよび港の仕事に従事する人とその家族のため、代祷と信施をささげる日曜日と定められています。

世の中すっかり飛行機が主流の時代になり、移動するのが常識になりましたけれども、原油や貿易物資など、まだまだ船で運ばねばならないことがたくさんあります。飛行機でしたら短時間で到着することが可能ですが、船の場合は相当の時間を要する上、海上の危険にさらされつつ、その任務を果たさねばなりません。海での仕事はいつも危険と隣り合わせです。こうした人々のための働きが、ミッション・トゥ・シーフェアラーズであり、現在もその働きが全世界で続けられています。

ミッション・トゥ・シーフェアラーズは世界各地の港に拠点を持ち、船員（海員）のための働きを続けています。彼らにとって港への停泊期間は貴重なリフレッシュの時です。そこでミッション・トゥ・シーフェアラーズは、港に宿泊施設等を設置して、停泊期間中に家族と一緒に過ごせるようにしたり、停泊がまとまった期間になる場合は、旅行もできるようにするなどの働きもあります。また、大変残念なことに海上で船員が逝去した場合は、葬儀の役割もミッション・トゥ・シーフェアラーズの重要な任務です。

こうしてミッション・トゥ・シーフェアラーズは、船が港へ停泊している間という、限られた中で船員たちへの働きを続けています。日本では横浜・苫小牧・神戸に拠点が設けられています。

しかしながらミッション・トゥ・シーフェアラーズの働きも困難を抱えています。船が港へ停泊している間、船を所有する会社は港へ停泊料を支払わねばなりませんので、経営上、港への停泊期間を最小限にしようとしています。また船の設備も電子化により、船が大型化するのに対して船員は逆に減少し、船員たちは港の停泊期間が短縮される上、数少ないメンバーでより大きな船の運航をせねばならないのです。また航海は安全が保障されているわけではなく、海賊が出没して彼らの行く手を阻み、命をも危険にさらしています。それに関わるミッション・トゥ・シーフェアラーズの働きも、困難が増しています。

私たちの日々の生活が、こうした船員（海員）によって支えられていることを改めて覚え、本日はそのための働きであるミッション・トゥ・シーフェアラーズのため、代祷と信施をささげるわけです。埼玉県は海に面しておりませんが、海を通して私たちの生活が支えられていることに変わりはありません。そのことを再認識すると共に、教会が船員たちに関わり続けてきたことを、改めて覚えたいと思います。

本日の福音書に目を移してまいりましょう。本日の福音書は、よいサマリア人のたとえ話です。困っている人、傷ついている人を助ける必要があるのはいつの時代も同じことです。祭司もレビ人も、その務めを与えられ、はたしている人たちでした。しかし彼らは自らの務めを優先し、人のことを後回しにしたのです。頭ではわかっているにもかかわらず実際に行う時になるとなかなかそうはいかない人間の姿が現わされています。

サマリア人がこの人に必要な対応をし、最後には既定の倍のお金を支払って対応を頼み、去って行ったというわけです。

誰がこの旅人の隣人になったかという問いに対し、その人を助けた人だと答えている点に注意してみましょう。この話を聞いた人なら、隣人となつたのはサマリア人だと答えるでしょう。しかしこの人はそれが言えませんでした。ユダヤ人はサマリア人を差別し、400年以上にわたって関係を断ち切っていたのです。いくら必要なことをしてくれたからといって、隣人というわけにはいかなかったのです。人にレッテルを貼ること、差別することがどういうことかを改めて思わされます。

イエス様はこの物語を通して、あなたも同じようにしなさい、誰であろうと助けられる人になりなさい、差別をしない人になりなさい、人にレッテルを貼ったりすることのないように生きなさいと言われていたのです。このことを本日は、海の主日とともにしっかりと覚えたいものです。